〈書評〉

THE BODHISATTVA or Samantabhadra

A NOVEL BY ISHIKAWA JUN

William Jefferson Tyler, Translator

鈴木貞美

1

一九九〇年の春、日本の現代文学にひとつの事件が起こった。人びとの耳目を集める新しい作品が生まれたとか、文壇を驚かすようなハプニングが起こったという類の事件ではない。それは、評価と需要、つまり享受史にかかわるものである。

COLONBIA UNIVERSITY PRESS より"THE BODHISATTVA or Samantabhadra"が出版されたこと。これはまさしく「事件」の名に価する出来事である。

"THE BODHISATTVA"は石川淳『普賢』の William Jefferson Tyler による英訳である。

『普賢』は、一九三六年（昭和十一年）に芥川賞を受賞した作品で、石川淳の初期の代表作のひとつ。石川淳は日本の現代文学を代表する作家のひとりであるにもかかわらず、その作品の外国語への翻訳は少ない。日本の現代小説全般にわたる組織的な紹介が、まともになされてこなかったことがその原因の第一であるが、石川淳の場合、加えて、文章が、見立てや縁語、語義の重層など日本語の修辞をつくし、イメージの転換やアレゴリーやイロニイの頻出する饒舌体で、綾織物にもたとうべき錯綜を示しつつ速い速度で展開し、内容も一義的に定めることが困難なものが多いため、最も翻訳が困難な現代作家とみなされるという事情が重なる。実際、翻訳に挑戦しながら、結局放棄した、と聞いた例もいくつかある。

これまでのところ、英訳は、Donald Keene による『紫苑物語』訳、William Jefferson Tyler による『名月珠』訳の二篇があるのみ。他の外国語への翻訳は、『紫苑物語』がロシア語に、『焼跡のイエス』がフランス語に翻訳されたくらいであろうか。

しかし、外国語への翻訳が少なく、また困難な現代作家の作品が翻訳されたことをもって、「事件」というのではない。それは、一にかかって、翻訳の見事さにある。そして、その見事さは、名文訳であるという意味より、実に深い理解に立つ訳である

ということに集約される。

2

一例を引こう。

オルレアンの少女とボアシイの老女とを併せ書かうとするのは塵と花とが吹きとちる変化微妙の女の顔を描き出さうといふこころざしに発するもので、いささか跛の譬ながら、この二人女のあしらひはいはばわたしの趣向に係る見立寒山拾得である。寒山拾得が文殊普賢の化身ならば、文殊の智慧などおよびもつかぬ下根劣機の身としては寒山の真似よりもまづ拾得の真似で、風にうそぶき歌ふ前に箒をかついで地を払ふ修業こそふさはしからう。しかし、かりにも拾得の箒を手にした以上、町角の屑を掻きあつめるだけではすまず、文殊の智慧の玉を世話に砕いて地上に撒き散らすことこそ本来の任務で、それなくしてはこの世の荘厳は期しがたく、何もおのれが還相の菩薩だなどとうぬ惚れてゐる次第ではないが、そのうぬ惚れのかけらさへなかつたとしたらば存在は空になるわけで、わたしの一挙一動が拾得の高風に似ても似つかぬ笑止の沙汰ではあるにもせよ、願はくはかの大士のおん振舞、おん身に於て百宝の花を放ちたまふ菩薩の遊戯、馥郁たる普賢行につながらうとする一念を秘めてゐればこそ、前述の遊廓の件なども恬然とぶちまける勇猛心が湧いたのであつて、今や普賢菩薩はわたしの守本尊となつたのだ。

この小説の語り手は、一四二九年、オルレアンの包囲を破ったジャンヌ・ダルクの頌歌を作ったフェミニズムの詩人、クリスティーヌ・ド・ピザンの伝記を書こうと志している。そして、ジャンヌ・ダルクを文殊菩薩の化身としての寒山にたとえ、クリスティーヌ・ド・ピザンを普賢菩薩の化身としての拾得にたとえて、書く己れを拾得になぞらえ、普賢菩薩を己れの守り本尊とする所以を述べる条りである。

さて、かかる一節がいかに翻訳されるものか。

To think in this way is, perhaps, utter nonsense, a silly juggling act on my part, but if I have chosen to write simultaneously of both women, to parallel the story of the Maid of Orléans with that of the Old Woman of Poissy, it is because I have longed to capture with my pen each subtle change fashioned upon the protean visage of womankind as she stands before the winds bearing both the dust and the blossoms of life.

My illumination of the tale of these two women is a palimpsest of my own devising, and as if that were not enough, let me erase the text and write of them in still larger terms. Albeit a slightly lame metaphor, the story of Joan and Christine has also become for me an analog version of the tale of that legendary pair of T'ang Buddhism, the long-haired, laughing jackels of Zen

iconography—the besotted poet of Cold Mountain, Han-shan, and his sidekick, the broomsweep, Shih-te.

And, if this pair of Han-shan and Shih-te is, as legend has it, a manifestation of the tandem attendants of the historical Buddha, the Bodhisattva of Wisdom Mañjuśrī and the Bodhisattva of Compassion Samantabhadra, then let me call forth to center stage the broomsweep, this common simpleton who can never equal Mañjuśrī in wisdom yet whose kitchen scraps have nourished Han-shan's genius. Rather than the highbrow antics of the Cold Mountain poet who is forever howling and reciting before the wind, how much more fitting for one so inferior and dimwitted as myself to watch and imitate the humble ways of Shih-te! Let me seek my apprenticeship in the Way of Samantabhadra by following his example, and shouldering a broom, make a clean sweep of the earth.

あまりに長くなるので、訳文は途中まで割愛した。

両者を比べて外見上すぐに気づくのは、改行のない一連の文章に、改行がほどこされていることである。

次に、内容に立ち入ると、英文引用部冒頭が、和文の冒頭とそろっていないことに気づく。

和文の引用部の前文は次のようなものである。

ジャンヌ・ダルクの出現をぽつかり宙に浮き出た荒唐無稽のまぼろしと眺め去ることなく、地上の塵にまみれ砕けた多くのクリスティヌの粉末が天日に舞ひつどふ花輪のけしきと観じつつ、逆に世のさまざまの女のすがたにジャンヌ・ダルクの一瓣を拾ひ上げようとするのは愚かしいわざであらうか。

この末尾を受けて、英文は完全にパラフレーズされていることが知れよう。

そして、寒山拾得に施された解説。

これはただの翻訳ではない。小説を読み解き、完全に己れのものにした上で、英語圏の読者のために分かり易く噛み砕いて、リライトしたものと言った方が、むしろ正確である。翻案と言ってもよいが、登場人物や場所まで英語圏の読者のために置き換えるようなことまでなされているわけではない。あくまでも理解を助けるための措置である。

会話も総て改行され、話者が明示される。double meaning はほどかれる。そのために、うねりながら次つぎに観念を生み出してゆくような原文のリズムが、犠牲になったとしても、いたしかたなかろう。こうした措置については、Preface に訳者のことわりがある。

3

翻訳の困難はこうして切り抜けられた。このようにして、石川淳『普賢』の翻訳が完成したこと自体が、現代日本文学にとっ

て、ひとつの事件であると言えるのである。

なぜか。その理由を一言で言うとするなら、一九三〇年代の日本において、紛れもなく西欧の二〇世紀における小説の探究に比肩すべき方法的追究がなされ、そしてそれが全く独自の形態を生み出していたことの最も鮮明な証左が、外ならぬこの作品であるからだ。

そうした事態とその意義については、訳者が充分承知している。いや、そういう訳者であったからこそ、この困難な翻訳に取り組み、完成にまでこぎつけ、そしてその意義を充分翻訳に生かすことが出来たと言うべきである。

訳者が翻訳に付した CRITICAL ESSAY は、『普賢』の形態的特徴を "reflexive" の語によって規定し、その内的構造を実に明晰に分析したものだが、そこには、modern and postmodern の文学形態についての理解が革新されたことによって、この作品が日本文学の戦前と戦後の前衛的追究を橋渡しする重要なものであることがわかる、と述べた一節が見える。

modern and postmodern の文学形態についての理解の革新とは、たとえば、Gérard Genette が Marcel Proust の作品分析を通して獲得した諸概念などを指す。

そのあたりの事情について、先の引用部分にたずねてみよう。

たとえば、〈いささか跛の譬ながら、この二人女のあしらひはいはばわたしの趣向に係る見立寒山拾得である〉の英訳、とくに、〈見立〉には、palimpsest の語が用いられている。

palimpsest は、もともと書かれてあった texte を消して上から新たな texte を書きこんだ羊皮紙の写本を言う。そのため考古学者が、下に隠された text を発見したりするようなことが起こる。隠された古層をもつものの比喩にも用いられる。

William Jefferson Tyler は、CRITICAL ESSAY の中で、人間の心を palimpsest にたとえ、隠された層をもつことを述べた Baudelaire の一節を引用し、また、二〇世紀ではこの技法が、Imagists や Ezra Pound らにも見られることを指摘している。Gérard Genette が、palimpsest を textuality の多層的構造という意味で用いて、Proust の文章の分析に斬新な理論的成果を見せたものである。

たしかに、こうした理論的成果の助けを借りなければ、『普賢』の翻訳の土台となった高い作品理解には到達しえなかったかも知れない。というより、こうした理解に支えられた翻訳によって、はじめて『普賢』が、日本における二〇世紀的な小説の方法的追究の実際を語る作品として、海外にも開かれたものとなった、というべきである。

川端康成や三島由紀夫らの作品が、西洋近代的知性にも通じ易い東洋趣味のもとに流布され、また日本の前衛的作品として安部公房の作品が受け入れられた段階の上に、今日の日本の紹介として当代の作品がアトランダムに翻訳されるような状況が重なっているのが、日本の小説の海外における需要の現状だとすれば、William Jefferson Tyler による石川淳『普賢』の訳の完成は、新たな窓を開く仕事であり、このことを指

して、私は「事件」と称するのである。

William Jefferson Tyler は、井澤義雄や野口武彦らの先行する解読、批評の成果をも充分にとりいれたうえで、Gérard Genette らの新しい批評によって、『普賢』を咀嚼し、翻訳し、明晰な CRITICAL ESSAY を書いている。CRITICAL ESSAY には、仏教用語などへの周到な NOTE が付けられている。

そうした作業を抜きにして、石川淳『普賢』の翻訳は不可能だったのであり、また、その意義も充分には明らかにならなかったであろう。石川淳『普賢』はまさにそうした作業を要求する作品なのである。

かかる見事な成果を眼前にして、私は賛辞を惜しまない。その見事な翻訳が現代日本文学の核心のひとつを海外に開く窓を穿つ仕事であると同時に、訳者による明晰な CRITICAL ESSAY は、日本における石川淳研究の水準を引き上げることにも寄与することは言をまたない。

4

しかし、私はこの書評を賛辞のみで終わらせようとも思わない。同じような立場から石川淳の研究に携わる者として、やや細かい点に、いくつかのコメントを付けておきたい。

そのひとつは、先に問題にした palimpsest の技法に関することである。William Jefferson Tyler は、CRITICAL ESSAY 中で、「見立て」と「併せ書こう」にそれぞれ一節を費やし、「見立て」には、GLORIFIED ANALOGY、「併せ書こう」には ART OF PALIMPSEST の訳語をそれぞれ与えている。

先に引用した翻訳中では、〈見立て〉には palimpsest の語が用いられていた。

palimpsest を、texte の多層構造の意味に用いる限り、これは混乱ではない。そのような意味で用いられたとき、palimpsest は〈見立て〉のもつ、〈二重焼き〉（服部幸雄）的機能に、よくそぐう訳語たりえよう。

しかし、palimpsest を原義に近い「二重写本」の意味で用いるなら、古い層は表面から隠されたものとなる。引用の訳文中で訳者は、原義に近い意味でこれを用い、そのため、and as if…以下ややうるさい説明がつくことになった。let me erase the text…とまで言わずに、ここは、double image の語など用いた方が、より正確なのではないかと思えるところである。

「併せ書こう」は、書かれるジャンヌ・ダルクと書くクリスティーヌ・ド・ピザンの関係、つまり、書く—書かれる、の二つの層をもろともに書こうとする、語り手である私の意図を告げている。

CRITICAL ESSAY 中には、palimpsest の解説に、double-exposed photograph の語も見えるだけに、ややこだわってみた。

というのも、石川淳は一九二四年、ジッド『背徳者』の翻訳を刊行しているが、その中に、次の一節が見えるからである。

わたしは自ら二重写本に比した。わたしは、同じ紙の上において後代の文字の下に、さらに限無く尊い太古の原文を発

見した時の学者の悦びを味つた。この蔽された原文は何であつたか。それを読まうがためには、まづ後の文を消すことを必要とはしなかつたか。

主人公ミシェルが、アフリカ旅行中に近代的知性の下に眠らされていた原始的欲望に目覚め、近代的知性を捨てる覚悟を語った一節である。ジッドの近代文明への徹底的な懐疑を示す一節であるが、この〈二重写本〉は、もちろん palimpsest の訳である。

これについては、一九八九年の『早稲田文学』七月号で松本眞一郎が紹介している。この号には、William Jefferson Tyler も、「『普賢』論」（安東文人訳）を寄せている。CRITICAL ESSAY の趣旨は、ほぼここに見て取れる。

しかし、いずれにしても、〈見立て〉の技法をどのように訳すかは一筋縄ではいかない問題であり、それを palimpsest の構造と連絡を付けた功績は大きい。

二〇世紀の文学においては、洋の東西を問わず、前近代の文化の財産目録から富の借用が見られ、それによって、近代小説形態からの脱出がはかられているのである。多層構造化もそのひとつであり、日本でもそれは様ざまに行われたが、石川淳は特に、「見立て―寠し」や「もどき」技法を意識的に用いて、それを成功させた作家である。もちろんそれには前史がある。その前史とその意味の解明は、まだ端緒についたばかりである。

また、石川淳がこうした技法を採用した理由を、これまでの通説は、軍国主義台頭期における韜晦の姿勢に求めてきたし、訳者もそれに従っているが、私は疑問をもっている。性表現を除いて、文学作品に対する直接的な思想弾圧が強まるのは、反戦思想をあらわにした石川淳の「マルスの歌」などが摘発される一九三八年からのことで、それ以前には、日本共産党系の作家のものに集中しているのが実状である。

『普賢』は、図式的に語れば、共産党の地下活動に従事するユカリの幻――これがジャンヌ・ダルクと重ねられ、語り手のユカリに対する懸想が、クリスティーヌ・ド・ピザン伝に彼を向かわせるのだが――に語り手が訣別し、肉体をもつ生による地上の救済を求めるに至るまでを書く小説で、転向の時代の影はあっても、このモチーフそのものが直接の弾圧の対象となるとはとうてい考えられない。

それに関連して、この転向の時代には、小説を書こうとして書けないことを書くというパターンの小説が多数生まれており、形式の上からは『普賢』はむしろそちらに属する。語り手は、クリスティーヌ・ド・ピザン伝を放棄する。この放棄は先のモチーフと関係する。

訳者は『普賢』を、メタフィクションに分類し、解説している。そのことの意義は大きいことを認めた上で、やや突っ込んだ議論をしておきたい。

ひとつは、転向に象徴される時代における内面の屈折や空虚感の問題と、筆に対する弾圧への対抗措置とを直接同一化すべきでないこと。

もうひとつは、石川淳の形態上のメタフ

ィクションの追究は、すでに一段落しており、その要素がむしろ目立たぬように内的に構造化されているのが『普賢』の特徴で、それが流行した「小説を書けない小説」の形式とは、全く相を異にするものとなっていることである。系列から言えば、〝小説の小説〟であるが、形態は、〝書くことを放棄し、観念から現実の生に向かう小説〟である。石川淳がこの時期、そうした志向をもっていたことは、中編「履霜」（一九三七）にも明らかである。

いずれにしても、これらのことは訳者の責任ではない。日本の小説の現代的追究に関する研究が、この日本で、全く立ち遅れているゆえのことである。

その意味でも、本書の刊行は、内外における日本現代文学の評価と研究に刺激と示唆を与えてくれるものであり、その意義は大きいといわなければならない。